

9. 建築物

9-2. 家の建て方

9-2-1. 建築

西向きや北向きの家はだめと言われていた。日の出る方に家のロルンプヤル *rorunpuyar* (神窓) を向けなければならないと言われていた。朝、太陽が出たら、窓から見える。

[白沢ナベ氏]

10歳まで住んだ家は、ヨシの段葺の家だった。壁もヨシで葺いてあった。

家(チセ *cise*)を作るのを見たことがある。子供の頃は家を建てているのを見物に歩いたものだ。梯のようなもので屋根に上がり、ヨシを束にして上に投げているのを覚えている。

[山川キク氏]

シンナ チセ カラ *sinna cise kar* (別に家を作る) は親の家を離れて独立すること。親がいい人なら子供に家を作ってやるが、そうでなければ子供は自分で作らねばならない。親がだめだと子供も家を建てることも何もできないからたいへんだ。

[白沢ナベ氏]

9-3. 家屋の内部構造

9-3-1. 屋内とその配置

10歳まで住んだ家は、壁もヨシで葺いてあった。戸口や窓には、ヨシを編んだものが下げてあった。この家は、私が17、8歳頃まで残っていた。

戸口、窓に下がっているすだれのようなものは、スナキ *supki* といい、スナキの下がっている窓をスナキプヤラ *supki puyar* といった。昼間は、巻いて上で留め、夜間下ろした。

[山川キク氏]

今でいう玄関にあたるものをセム *sem* という。セムの入口(南向き)と家からセムへの出口(西向き)の2箇所にもスナキを下げた。家からセムへの出入り口が本当の家の入口で、アパオウシタ *apa ousi ta* 「戸口で」と言うときは、ここを指す。ここには、引き戸を付けることもあった。

[山川キク氏]

南向きの窓(イトムンプヤラ *itomun puyar*)の上には、イトムンイナウ *itomun inaw* という削り掛け(イナウキケ *inawkike*)が、2~4束付けてあった。

[山川キク氏]

家の内側の出入り口のそばにイナウが刺してあった。これは、チセコロイナウ *cise kor inaw*

で、「家の守り神」「家の親方」だ。マタギに出るとき、これにカムイノミ kamuy nomiして行くらしい。

[山川キク氏]

神窓（ロルンプヤラ rorunpuyar）は、「お日様の出る方向」にある。その外の空間は、イナウチパ inaw cipa と呼ばれる。神窓は、拝む（ノミ nómi）神が出入りするところだ。ふだんは閉めてあり、何か心配事があるとき、家の主人（チセコロクル cise kor kur）が開けるものだ。カムイノミが終わったら、チセコロクル自身が閉める。神窓に女や子供が近づいたり汚したりしてはいけなかった。（千歳編6-4-6参照）

[山川キク氏]

床は張っておらず、地面に草が敷かれ、その上に莫藪（ヤットウイ yattuy）が敷かれていた。寝室は特になく、ヤットウイの上に寝た。後に、板床を張るようになっても、ヤットウイを敷いた。

[山川キク氏]

上座に向って左隅の空間をロルンソパ ror un sópa とか、チセソパ cise sópa という。ロルンソパの北壁には、刀（イコロ ikor、エムシ emus）が掛けてある。また、行器（シントコ sintoko）が積んである。シントコの中には、トゥキ tuki、イクパスイ ikupasuy がしまつてある。

[山川キク氏]

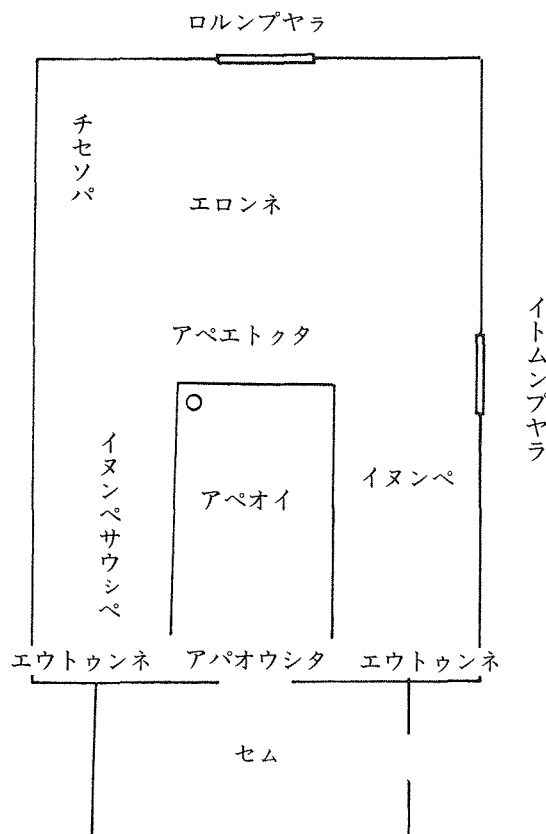


図5. 屋内の構造

9-3-2. 炉とその周辺

炉の上座（アペエトク ape etok）には、家の主人（チセコロクル cise kor kur）が座り、上座に向って左の座（右座）に主婦（チセコロメノコ cise kor menoko）が座った。ただし、チセコロクルがアペエトクに座るのは、カムィノミのときだけで、ふだんは右座で背中あぶり（セトウルセセッカ seturusesekka）をしている。（ハリキソ harkiso という言葉を覚えているが、どこを指す言葉か分からない）。

[山川キク氏]

夫婦は、頭を上座に向けて、右座に寝た。

[山川キク氏]

下座（エウトウンネ eutunne）の戸口のそばに（アパオウシタ apa ousi ta）は、食器や鍋などを置く棚があった。水の入った樽は、セム sem に置いてあった。食器はセムで洗った。

[山川キク氏]

ニヤトウシということばは知らない。バケツをアエワクカタフ a=ewakkatap という。

[白沢ナベ氏]

炉をアペオイ apeoi といった。炉は、3本の炉縁木（イヌンペ inunpe）に囲まれ、出入り口に面したところには、炉縁木を置かなかった。炉に向う上座をアペエトクタ ape etok ta という。

[山川キク氏]

「火を焚く」ことをアペアリ apareari という。火には汚れたものをくべてはいけない。例えば、鼻をかんだ紙をくべるなどは、いけない。ごみも燃やさない。火に汚れたものをくべると、カムィ イルシカ アン シリ ネ kamuy iruska an siri ne 「神が怒る」といわれる。

[山川キク氏]

灰（あく）をウナ úna という。火の周りの灰をならすことをウナ ウク úna uk という。火櫛（アペキライ ape kiray）でならした。キライ kiray というのは、「櫛」のこと。

[山川キク氏]

ウナパナ チホプニレ unapana ci-hopunire 灰が立つ。

[白沢ナベ氏]

「煙」をスプヤ supuya、「煙が立つ」をスプヤアツ supuya at という。屋根のあわい（棟の南北の両端）には、孔が開いていて、煙が出るようになっている。年中開いているが、そこから雪が降り込むことはなかった。

[山川キク氏]

炉の北東隅の灰（あく）の中に1つ丸太が刺してあった。これは、イヌンペサウシペ inunpesauspe という。この上でイナウ削り（イナウケ inawke）をすることも、チタタフ citatap（刻む）をすることもなく、ただ置いてあるだけだと思う。

[山川キク氏]

イヌンペサウシペ inunpe sauspe は二つある。根は深い。

[白沢ナベ氏]

家の中では、カバ(樺)の皮をあぶって巻いたもの(チノエタツ cinoetat)を又木に挟んで
明りとした。

[山川キク氏]

9-3-3. 火事

火事が起きたときに見舞いに来た人はイケウエホムス ikewehomsu というのをやった。
火事の現場に行き、「たいへんだったね」という意味の声出しをすることだ。

[石田ナカ氏、小田イト氏]

9-4. 屋外の構造

水汲み場

昔は、本流の水を飲んでいて。水汲み場をペタル petaru といい、足が濡れない程度の板
で作った棧橋が付いていた。舟つき場の上手に作った。1家に1箇所ペタルがあった。シコツ
湖の周囲で、除草薬の散布をするようになってから、カニ、ドジョウ、カジカ、ヤマベがいな
くなったので、飲まなくなった。ペタルで鍋、食器などを洗うこともあった。しかし、洗濯は
だめで、特に、肥(こや)しのガンガン(缶)は洗うなといわれた。

[北野ハル、石田ナカ氏]

渡し場

「渡し場」は、ウクシパウシ ukuspa usi という。岸には、杭が1本立っていて、舟をつ
なげる綱(チパツ cipat)の片端の輪をこれに通して留めた。綱は、シナノキの樹皮で作った。
杭はウライ úray という(ウライ シネプ アシ úray sinep asi「杭を1本立てる」)。棧橋
のようなものはなかった。川には、ロープが渡してあり、これを伝って舟を渡した。舟を持っ
ていない人がよく借りにきた。「川を渡る」ことをエクシネヤパン ekusne yap=an という。

[北野ハル氏]